続うたかたの記

随　筆

戸　倉　仁一郎*

1．ミュンヘン—1886年

森　林太郎（号，鷗外，1862—1922）が，ミュンヘン大学衛生学教室のペッテンコーフェル教授に師事すべくミュンヘンに到着したのは，明治19年（1886）の3月のことであった．3月初旬とはいえ，町には雪が舞っていた．

折から謝肉祭の最終日のこととて，路上には仮面をかぶった多数の男女が，踊り狂っていた．それだけではなく，これ迄いたベルリン，ライプチッヒ，ドレスデンなどと違って，はるかに南のこの地では，気候も温和で樹木も繁茂しており，どこか日本と似ていた．彼がドイツの土を踏んで，すでに1年5カ月がたっていた．

図1　森鷗外

彼はこのあとミュンヘンに1年3カ月滞在したのち，再びベルリンを尋ね，ベルリン大学のコッホ教授に学び，明治21年7月にベルリンを発して，故国に向うのである．

鷗外は一軍医として，衛生学や細菌学の研修にきたのではあったが，ドイツ陸軍の衛生および医療行政全般の調査も，必要なことだった．何分，明治新政府が発足して20年に足らず，海外に吸収すべき知識は，無数にあった．

2．広面大耳

鷗外はこの時24歳で，自信にみちていた．ベルリンで橋本綱常軍医監から，まづライプチッヒにゆき，衛生学教授ホフマンの指導をうけ，次にミュンヘンのペッテンコーフェルに，さらにベルリンのコッホの門を叩け，と指示された．ライプチッヒでは，ほぼ1年間滞在した．その上願ってもない事に，ザクセン軍団の軍医部長ロートと知り，ドレスデンでの，ザクセン軍団の冬期軍医講習に参加できた．

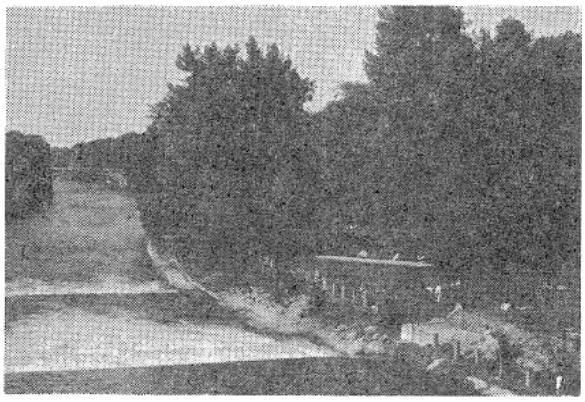

図2　ミュンヘン市内を流れるイサール川

ミュンヘンへ来た時，鷗外はすでにドイツ語の，読み書きはもちろん，会話にも，事欠かなかった．その上，ザクセン軍団に参加することで，ドイツ軍の軍医行政はすべて知りつくすことが出来たのであった．独逸留学の目的の，半ばを達していた．

その上，何故か彼は，ドイツ女性の目をひいた．さすが君子国日本の若きエリートであった．

そしてそのころの日本の海外留学生のすべて

*戸倉仁一郎（Niichiro TOKURA），大阪府立工業技術研究所，顧問，大阪大学，名誉教授，工学博士，応用化学

がそうであったように，彼も日本の興隆を自分の双肩にになった気持で，ドイツに来ていたのであった．

この森と湖の国，バイエルン（ババリア）の首都で，ペッテンコーフェルの許で1年を過した事は，鷗外にとって，何と幸運であったことか．

ペッテンコーフェル(Max von Pettenkofer, 1818～1901）の家の書斉で，初対面の鷗外は，その部屋を，「濶大なれど 華麗ならず」，と評し，また師を，「広面大耳の白頭翁なり，弊衣をまとひて書籍を 堆積したる机の 畔に坐す」，とその日記にしるしている．

ペッテンコーフェルは，「緒方正規（このとき東大衛生学教授）も長く自分の許で勉強した．自分は彼を愛すること甚しい．君もまた緒方の如くならんことを望む」と言った．

あとから考えても，鷗外にとってミュンヘン時代が，一番楽しかったのではないか．のちにベルリンでコッホに学んだが，ベルリンはドイツの首都だったので，日本からの政府高官や知己の来訪が絶えず，その案内や通訳で時間をとられた．その上，日本人同志の交際や，いやな中傷などがあって，ゆっくり勉強する間もなかった．

3．俠気の人

鷗外が初めて会った時，すでにペッテンコーフェルは68歳であった．のちに鷗外は漢字で別天過俠氏と書したほど，この先生は俠気のある人だった．鷗外のドイツ日記にも，11カ所にその名前が出るほど，鷗外はこの師に私淑した．白髪，長身の偉丈夫であっただけでなく，夜鷗外と共に公園に行って，円錐木戯（遊動円木か）にたわむれるほど，無邪気な人だった．

マクス・フォン・ペッテンコーフェルは，ドナウ河の上流，ノイブルクの近くで生れた．子供の時，ミュンヘンの王宮で，宮廷薬剤官兼侍医をしていた伯父の家に貰われ，王宮内で生長し，のち化学者，宮廷薬剤師となった．そしてバイエルン王マキシミリアン二世，（1811～1864)，の信任を得た．

またミュンヘン大学の医学部に，世界で始めて衛生学の講座を設け，その初代教授となった．のち世界各地の医学部に衛生学の講座がおかれるようになるのである．衛生学の始祖であった．

ペッテンコーフェルは，本来は化学者であった．彼の衛生学は医学というよりは，現在の環境工学に近いものであった．

マクスは少年の時から，マキシミリアン二世に可愛がられ，ミュンヘンの大学教授になってからは，マキシミリアン二世の侍医あるいは相談役のような立場にあった．

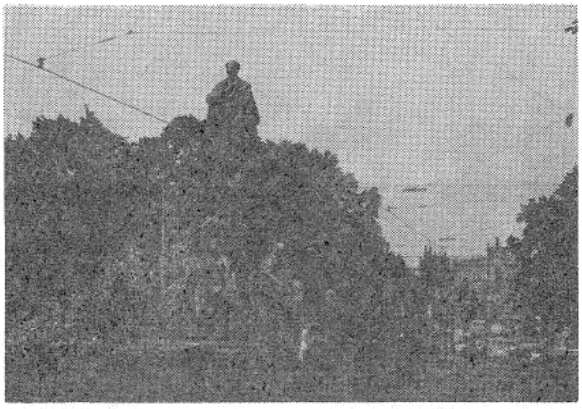

図3　マキシミリアン二世記念像

マキシミリアン二世は，ミュンヘンの文教と産業を振興させたく思っていた．それには優秀な学者を集めなければならぬと考えた．有名な歴史家ランケなどの文人を招いた．王の意をうけて，ペッテンコーフェルは，自分の恩師の化学者リービッヒを，北のギーセンからミュンヘンに迎えるのに成功した．それは1852年のことだった．その時からミュンヘンは有機化学の研究でも，ヨーロッパをリードするようになるのである．リービッヒのあとには，一騎当千のバイヤー（藍の合成)，フィッシャー（糖，プリン，蛋白)，ウィルシュテッター（葉緑素)，ウィーランド（ステロイド）等が続いた．またペッテンコーフェルはフオイトという協力者を得た．フオイトもリービッヒの弟子で，世界における生理学の草分けの1人である．

不幸なことに，マキシミリアン二世は，病気で，1864年に他界し，ペッテンコーフェルは，王室から離れた．

4．うたかたの記

マキシミリアン二世のなきあと，息子で18歳

のルドウィッヒ二世（1846～1886）が王位を継いだ．若い王は国費を傾けて，楽聖ワグナーの庇護にかけた．債鬼に追われて行方をくらましていたワグナーを探し出し，借金払いはもとより，大臣以上の給与で召しかかえ，ワグナーが死ぬ時（1883年）まで面倒をみてやるのであった．その上美しい城を，三つも建築した．リンダーホッフ，ヘレンキムゼー，ノイ・シュバンシュタインがそれらである．後の二つは，ルドウィッヒ存命中には完成に至らなかった．とくに，ノイ・シュバンシュタイン城は，ワグナーの楽劇に題材をとった壁画や，ローエングリーンの白鳥の置物などのある美しい城で，城山と紺碧の湖フォルゲンゼーの眺めはすばらしい．

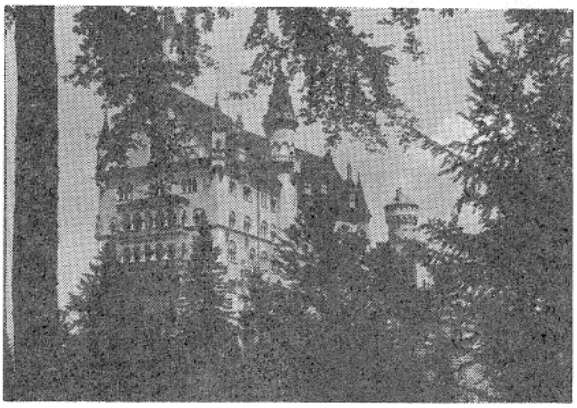

図4　ノイシュバンシュタイン城

ミュンヘンは，多くの湖水にかこまれているが南方20kmのスタルンベング湖は，一番近くまた景勝の地でもある．ルドウィッヒ二世は，国を傾け，心身を消耗した揚句の果て，狂気となりこの湖水で侍医をみちづれに水死するのである．

それは鷗外が，ミュンヘンにきて間もなくで，1886年6月のことであった．ワグナーが死んで，3年たっていた．鷗外はこのとき，侍医グッデンが王を助けようとして果さず，王に従って水死したことに深く感動した．

彼がこの話をもとに，ミュンヘンで親交のあった画家，原田直二郎をモデルとして，書いたのが，処女作「うたかたの記」である．

5．ナウマン事件

鷗外はミュンヘン滞在中，何度もこの湖を訪れている．ペッテンコーフェルも，この湖が好きでここに別荘を持っていた．

鷗外がきたとき，ペッテンコーフェルは，コレラの病因に就て，コッホとの論争にあけくれていた．自説を立証するため，コレラ菌を自ら飲んだりもした．「師は老いたり．そのコッホと論鋒を交ふるや，時には強弩の余勢に似たるものあり．吾党の此人を欽慕し来たりて，教を請うをみては，師の心中蓋し空谷跫音の念あるならん」と鷗外は誌している．熱血漢ペッテンコーフェルは，時には暴走したらしい．

ナウマン事件とは日本にも来て教えた，地学教授ナウマンが，ドレスデンやミュンヘンで，日本人の悪口を述べたことに，肚にすえかねた鷗外が，ペッテンコーフェルにすがって，ミュンヘンの有力新聞，アルゲマイネツァイツングに，反駁文を載せた事件である．鷗外の血気もさることながら，このときペッテンコーフェルは，鷗外の原稿を添削してやり，その上新聞の編集局長に紹介，紙上に掲載することに成功する．

鷗外は軍医としては，その位を極めて軍医総監となり，後には図書頭帝室博物館長となった．また山県公の恩顧をうけ，乃木大将とも親交があった．しかし，軍医行政にたずさわりながら盛んに文学活動をしたために，上司や世間に悪く言われた．左遷もさせられた．彼はそれを，少なからず気にした．

例えば「即興詩人」の序文に，「此訳は明治25年稿をおこし，殆んど九星霜を経たり．然れども軍職の身にあるを以て，……属するは大抵夜間若しくは大祭日，日曜日にして，……世或は予職を嘆(ひな)しうして，縦(ほしいままに)に述作に耽(ふけ)ると謂(い)ふ．寃(むじつ)も亦甚しきかな．」と述べている．

封建時代の教育をうけ，ドイツへ来て近代自由主義の潮流を身をもって知った鷗外は，また一つの悩める魂でもあった．

．舞姫のエリス

鷗外の文学作品で，初期のドイツ三部作といわれるものは，ベルリンを舞台とした「舞姫」（明治23年），ドレスデンの「文づかい」（明治24），それと「うたかたの記」(明治23)である．「舞姫」は留学生太田豊太郎と舞姫（原文ではエリス・ワイゲルト）との悲恋をテーマにして

いる．ここで太田は鷗外自身である．

鷗外が横浜へ帰着したのは，明治21年(1888)9月であった．この船のあとから一人のドイツ女性が，追いかけてくる．

日本滞在の1カ月をエリスは築地精養軒に過ごす．そして彼女は目的を達せず泣く泣くドイツへ帰るのである．鷗外一家は，このことをひたかくしにかくした．

エリスとは，どんな女であったのか．その謎を解こうとする鷗外研究家や鷗外ファンは多い．エリスの入国前後の事情が，はっきりしたのはやっと最近のことである．

鷗外は9月8日にフランス船アヴァ号で，横浜に着く．エリスは9月12日にドイツ船，ゲネラル・ヴェルデル号で，横浜に到着し，10月17日に同じ船で横浜を出港し，日本をあとにしている．エリスとは Elise Wiegert である．

昭和56年（1981）のこと，茨城大学の中川先生達の調査（当時の横浜週刊英字新聞の船客名簿）で，やっと上記のことが分った．さらに同じ年，金山氏らによって，エリスの船旅の詳細が，明らかになった．エリスは，鷗外の出国より4日も早く，ドイツのブレーメンを発し，香港で船を乗りかえて，横浜にきている．しかも香港の当時の英字新聞には，Wiegert ではなく，Elise Weigert と記されている．このころの英字新聞の綴字の信頼性は，横浜より香港の方が，上である．してみると，エリスの本姓もワイゲルトの方がたしかであろう．なんと，舞姫のヒロインの名と一致するのだ．

図5　マクス・フオン・ペッテンコーフェル

ドイツでも，氏族名詞の転化は多い．ペッテンコーフェルも，先祖は北方から来た人で，もとは Pettenhofer と名乗ったという．

吉野俊彦氏（山一経済研究所理事長）は，ドイツ各都市の電話帳で，Wiegert, Weigert 両姓の分布を調査した．北ドイツではウィーゲルトが多いがミュンヘンでは，Weigert 姓が圧倒的に多い．エリスの出身は，バイエルン地方ではないのか．

してみると，鷗外はエリスとベルリンではなく，ミュンヘンで知り合い，二人は別々だがベルリンに北上して交際を重ねたのではないか．ミュンヘンでの出合いの方がよく似合う．ミュンヘンはそんな町である．

鷗外や小金井良精の説得に応じて，すなおに帰独したエリスの心情はまことにあわれである．そのころの彼我の風俗習慣のちがいは，現在では想像もつかない程であった．またエリスは決して路上の花ではなく，教養の高い女であった．もちろんのことだが，帰国に際して，金銭的な要求もしなかった．

おわりに，筆者は鷗外のドイツ留学にあたって，ペッテンコーフェルあってこそのミュンヘンであったことを，つけ加えたい．

1901年の2月のある夜，一発の銃声がスタルンベルグ湖上にこだました．その湖は，15年前にルドウィッヒ二世を呑んだ湖である．

ペッテンコーフェルは，湖畔の別荘で83年の生涯を自ら閉じたのであった．

参　考　書

1）鷗外選集　第21巻，日記，独逸日記(1980)岩波．
2）吉野俊彦　双頭の獅子―森鷗外―（昭57）PHP．
3）Max Gruber, Ber. Chem. 36(1903) P.4512～
4）戸倉仁一郎　化学のあけぼの（昭57）共立出版．
5）なお，昭和52年に逝去された伊達一男氏は，阪大医学部出身，丹後の開業医だが，鷗外研究家として有名で，沢山の著作がある．